

葛飾砂子

泉鏡花

青空文庫

縁日

柳行李

橋ぞろえ

題目船

衣の雫

浅

緑

記念ながら

縁日

一

先年尾上家おのえの養子で橘之助きつのおすけといった名題俳優やくしやが、年紀二十有五に満たず、肺を煩い、余り胸が痛いから白菊の露が飲みたいという意味の辞世の句を残して儂はかのうなり、鼯鼠ひいきの人々は謂いうまでもなく、見巧者みこうしやをはじめ、芸人の仲間にも、あわれ梨園の眺め唯一の、白百合しほ一つ萎しぼんだりと、声を上げて惜しみ悼まれたほどのことである。

深川富岡門前に待乳屋まつちと謂つて三味線屋さみせんがあり、その一人娘で菊枝という十六になるのが、秋も末方の日が暮れてから、つい近所の不動の縁日に詣まいるといつて出たのが、十時半過ぎ、かれこれ十一時に近く、戸外おもての人通ひとどおりもまばらになつて、まだ歸つて来なかつた。

別に案ずるまでもない、同町の軒並おなじび二町ばかり洲崎すさきの方へ寄つた角に、浅草紙、束藁たわし、懷炉灰かいろばい、蚊遣香かやりこうなどの荒物、烟草たばこも封印なしの一錢五厘二錢玉、ぱいれつと、ひーろーぐらいな処を商う店がある、真中まんなかが抜裏の路地になつて合角あいかどに格子戸造づくりの仕舞家しもたやが一軒。

江崎とみ、と女名前、何でも持つて来いという意気造づくりだけれど

も、この門札^{かどふだ}は、さる類^{たぐい}の者の看板ではない、とみというのは方違いの北^くの廓^{くわく}、京町とやらのさる楼^{うち}に、博多^{はかた}の男帯^{うしろ}を後から廻して、前で挟んで、ちよこなんと坐つて抜衣紋^{ぬきえもん}で、客^{ふところ}の懷中を上目で見るといゆる新造^{しんぞ}なるもので。

三十の時から二階三階を押廻して、五十七の今年二十六年の間、遊女^{みぬけ}八人の身拔^{みぬけ}をさしたと大意張^{おおい張り}の腕だから、家作などはわがものにして、三月ばかり前までは、出稼^{でかせぎ}の留守を勤め上りの囿^かこいもの、物、これは洲崎に居た年増^{としま}に貸してあつたが、その婦人^{おんな}は、この夏、弁天町の中^{なかどおり}通^{ひきてぢやや}に一軒引手茶屋の売物があつて、買つてもらい、商売をはじめたので空家になり、また貸札でも出そうかという処へ娘のお縫。母親の富とは大違いな殊勝な心^{こころがけ}懸、

自分の望みで大学病院で仕上げ、今では町住居ずまいの看護婦、身綺麗みぎれい
 で、容色きりようも佳よくつて、ものが出来て、深切で、優しいおとなので、寸
 暇のない処を、近ごろかの尾上家に頼まれて、橘之助の病びようじよく 蓐
 に附添つて、息を引き取るまで世話をしたが、多分の礼も手に入
 るる、山そだちは山とか、ちと看病づかれ疲も出たので、しばらく保養
 をすることにして帰つて来て、ちようど留守へ入つて独ひとりで居る。
 菊枝は前の囲者が居た時分から、縁あつてちよいちよい遊びに行
 ったが、今のお縫になつても相変らず、……きつとだと、両親ふたおや
 が指図で、小僧兼内弟子の弥吉やきちというのを迎むかいに出すことにした。
 「菊枝が毎度出ましてお邪魔様でございます、難ありがと有う存じます。
 それから菊枝に、病氣揚句だ、夜更よふかしをしては宜よくないからお帰

りと、こう言うのだ。^{てめえ}汝またかりん糖の^{こわいろ}仮色を使って口上を忘れるな。」

^{いねむり}坐睡をしていたのか、^{ねぼけづら}寝惚面で承るとむつくと立ち、おつ

と合点お茶の子で飛出した。

わっしよいわっしよいと謂^いう内に駆けつけて、

「今晚は。」という^いと江崎が家の格子戸をがらりと開けて、

「今晚は。」

時に返事をしなかった、^{あがりまち}上^{あがり}框の障子は一枚左の方へ開けて

ある。^{とつつき}取附が三疊、次の間に^ま灯は^{あかり}点いていた、弥吉は土間の処

へ^{つつた}突立つて、委細構わず、

「へい毎度出ましてお邪魔様でございます、^{ありがと}難有う存じます。

ええ、菊枝さん、姉さん。」

二

「菊枝さん、」とまた呼んだが、誰も返事をするものがない。

立続けに、

「遅いからもうお帰りなさいまし、風邪を引くと不可いけません。」

弥吉は親方の吩咐いいつけに註を入れて、我ながら旨うまく言つたと思つ

たが、それでもなお応じないから、土間の薄暗い中をきよろきよ

ろとみまわしたが、密そつと、框かまちに手をついて、及およ腰びごしに、高慢な顔かおつ

色きで内を透すかし、

「かりん糖でござい、評判のかりん糖！」と節をつけて、

「雨が降つてもかりかりツ、」

どんなものだ、これならば^{あらわ}顯れよう、弥吉は菊枝とお縫とが居

ない振で^{ふり}かつぐのだと思うから、笑い出すか、嘖き出すか、くす

くす遣^やるか、叱るかと、ニヤニヤ^{ひとり}独で笑いながら、耳を^{すま}澄したけ

れども沙汰^{さた}がない、時計の音が一分ずつ柱を刻んで、潮^{うしお}の退^ひくよ

うに鉄瓶の沸^にえ止^やむ響^{ひびき}、心着^{ひとけ}けば人^{ひと}気勢^{けはい}がしないのである。

「可笑^{おか}しいな、」と独^{ひとりごと}言をしたが、念晴しにもう一ツ喚^{わめ}いて

みた。

「へい、かりん糖でござい。」

それでも寂^{ひっそり}寞、気のせいか^{あかり}灯も陰気らしく、立つてる土間は

暗いから、^{くさめ}嚏を仕損なつたような変な目色^{めつき}で弥吉は飛込んだ時とは打つて変り、ちと悄気^{しよげ}た形で格子戸を出たが、後を閉めもせず、そのままには帰らないで、溝伝いにちようど戸外^{おもて}に向つた六畳の出窓の前へ来て、背後向^{うしろむき}に倚り^よかかつて、前後^{あとさき}を^{みまわ}して、ぼんやりする。

がらがらと通つたのは三台ばかりの威勢の可い^よ腕車^{くるま}、中に合^{あいの}乗^りが一台。

「ええ、驚かしやあがるな。」と年紀^{とし}には肖^にない口を利いて、大福餅が食べたそうに懷中^{ふところ}に手を入れて、貧乏ゆるぎというのを^や行^る。

処へ入乱れて三四人の登音^{あしおと}、声高にものを言い合いながら、

早足で近ちかづいて、江崎の前へ来るとちよつと淀よどみ、

「どうもお嬢さん難ありがと有うございました。」こういったのは豆腐

屋の女房かみさんで、

「飛んだお手数でしたね。」

「お蔭様だ。」と留とめという紺屋の職人が居る、魚勘うおかんの親仁おやじが居

る、いずれも口々。

中はさまに挟ったのが看護婦のお縫で、

「どういたしまして、誰方どなたも御苦勞様、御免なさいまし。」

「さようなら。」

「お休み。」

互に言葉を交かわしたが、連つれの三人はそれなり分れた。

ちよつとたたずイんで見送るがごとくにする、お縫はしまもの縞物の不斷着

に帯をお太鼓にちゃんと結んで、白足袋を穿はいているさえあるに、

髪がやかいむすび夜会結。一体ちよんまげ髻より夏冬の帽子に目を着けるほどの、

土地柄に珍しい扮装なりであるから、新造の娘とは知っていても、称とな

えるにお嬢様をもつてする。

お縫は出窓の処に立っている弥吉には目もくれず、踵くびすを返すと

何か忙せわしらしく入ろうとしたが、格子も障子も突抜あけけに開ツ放し。

思ためらわず猶予ためらつて振返った。

「お帰んなさい。」

「おや、待乳屋さんの、」と唐突だしぬけに驚く間もあらせず、

「菊枝さんはどうしました。」

「お帰んなすったんですか。」

いささか見当が違っている。

「病氣揚句だしもうお帰んなさいって、へい、迎いに来たんで。」
「どうかなさいましたか。」と深切なものいいで、門かどぐち口に立つて尋ねるのである。

小僧は息をはずませて、

「一所に出懸けたんじやあないの。」

「いいえ。」

三

「へい、おかしいな、だって内にやあ居ませんぜ。」

「なに居ないことがありますか、かつがれたんでしよう、呼んで見たのかね。」

「呼びました、喚わめいたんで、かりん糖の仮こわい声まで使ったんだけれど。」

お縫は莞爾にっこりして、

「そんな串じょうだん戯わをするから返事をしないんだよ。まあお入んなさい、御苦勞様でした。」と落着いて格子戸を潜くぐったが、土間を

透^{すか}すと緋^ひの天鵝絨^{とうてん}の緒^{いと}の、小町下駄^{こまち}を揃^{そろ}えて脱^だいであるのに屹^{きつ}と目^めを着^きけ、

「御覽^{ごらん}、履物^{りふぶつ}があるじやあないか、何を慌^{あわ}ててるんだね。」

弥吉^{やきち}は後^{あと}について首^{くび}を突^つ込^こみ、

「や、そいつあ気がつか^{つか}なかつたい。」

「今日はね河岸^{かし}へ大層^{まぐろ}着^あいたそうで、鮪^{まぐろ}の鮮^{あたら}しいのがあるからお

好^{すき}な赤^{あか}いのをと思^{おも}つて菊^{きき}ちゃんを一人^{ひとり}ぼっちにして、角^{かく}の喜^きの字^じ

へ行^ゆくとね、帰^{かえ}りがけにお前^{まへ}、」と口^{くち}早^{はや}に話^わしながら、お縫^{ぬい}は上^あ

がり^がが^まち

框^{かま}の敷居^{しきい}の処^{ところ}でちよつと屈^{かが}み、件^{くだん}の履物^{りふぶつ}を揃^{そろ}えて、

「何^{なん}なんですよ、蘆^{あし}の湯^ゆの前^{まえ}まで来^きると大勢^{たいせい}立^たつてるんでしように、

恐^{おそ}しく騒^{さわ}いでるから聞^きいてみると、銀次^{ぎんじ}さん許^{とこ}の、あの、刺^{ほり}青^{もの}

をしてるお婆さんが湯氣に上^{あが}つたというものですから、世話をしてね、どうもお待遠様でした。」

と、襖^{ふすま}を開けてその六畳へ入ると誰も居ない、お縫は少しも怪しむ色なく、

「堪忍して下さい。だもんですから、」ずっと、長火鉢の前を悠々と斜^{はす}に過ぎ、帯の間へ手を突込^{つっこ}むと小さな蝦蟇^{がまぐち}口を出して、ちやらちやらと箆^{たんす}笥の上に置いた。門口^{かどぐち}の方を透^{すか}して、

「小僧さん、まあお上り、菊枝さん、きいちゃん。」と言って部屋の内を^{みまわ}すと、ぼんぼん時計、花瓶の菊、置床の上の雑誌、貸本が二三冊、それから自分の身体^{からだ}が箆^{たんす}笥の前にあるばかり。

はじめて怪訝^{おかし}な顔をした。

「おや、きいちゃん。」

「居やあしねえや。」と弥吉は腹ばいン這になつて、覗のぞいている。

「弥吉どん。本当に居ないですか、菊ちゃん。」とお縫は箆より箆かに凭懸よりつたまま、少し身を引いて三寸ばかり開あいている襖、寢間に

にしておく隣ながの長四畳のその襖に手を懸けたが、ここに見えなけ

ればいよいよ菊枝が居ないのに極きまるのだと思うから、気がさした

と覺しく、猶ためら予つて、腰を据えて、筋しまの緊つて来る真顔は淋しく、

お縫は大事を取る塩梅あんばいに密そつと押開けると、ただ中ちゆうぶる古の畳な

り。

「あれ、」といいさまつかつかと入ったが、慌あわただしく、小僧を呼んだ。

「おつ、」と答えて弥吉は突然飛込んで、

「どう、どう。」

「お待ちなさいよ、いえね、弥吉どん、お前来る途で逢違いはしないだろうね、履物はあるし、それにしちやあ、」

呼び上げておきながら取留めたことを尋ねるまでもなく、お縫は半ば独言。ひとりごと蓋のあいた柳行李やなぎごうりの前に立膝になり、ちよつ

と小首を傾けて、向うへ押して、ころりと、仰向けに蓋を取つて、右手を差入れて底の方から擡もたげてみて、その手を返して、畳んだ着物を上から二ツ三ツおさ圧えてみた。

「お嬢さん、盗賊どろぼう?」と弥吉は耐たまりかねて頓興とんきような声を出す。

「待つて頂戴。」

お縫は自らおのが身を待たして、蓋を引いたままじつとして勝^かつてもとしま手許に閉^{しま}っている一枚の障子を、その情の深い目で瞋^{みつ}めたのである。

四

「弥吉どん。」

「へい、」

「おいで、」と言うや否や、ずいと立^くつて伴^{だん}の台^{だい}所^{どころ}の隔^へての障子。

柱^{つか}に搦^{かま}つて覗^{のぞ}いたから、どこへおいでることやらと、弥吉はう

ろうろする内に、お縫は裾すそを打って、ばたばたと例の六畳へ取つて返した。

両三度あちらこちら、ものに手を触れて廻つたが、台だい洋燈ランプを手にとるとやがてまた台所。

その袂たもとに触れ、手に触り、寄つたり、放れたり、筋すぢ違ちがひに退のいたり、背後うしろへ出たり、附いて廻つて弥吉は、きよろきよろ、目ばかり煌きらめかして黙然だんまりで。

お縫は額ランプさきに洋燈を捧げ、血が騒ぐか細おもての顔を赤うしながら、お太鼓の帯の幅つたげに、後姿で、ずっと台所へ入った。と思うと、湿しめりツけのする冷い風が、颯さつと入り、洋燈の炎尖ほさきが下し伏たぶしになつて、ちらりと蒼あおく消えようとする。

はつと袖で囲つてお縫は屋根裏を仰ぐと、引窓が開いていたの
で、煤で真黒な壁へ二三条引いた白い縄を、ぐいと手繰ると、
かたまり。

引窓の閉まる拍子に、物音もせず、五分ばかりの丸い灯は、口
金から根こそぎ殺いで取つたように火屋の外へふツとなくなる。

「厭だ、消しちゃった。」

勝手口は見通しで、二十日に近い路地の月夜、どうしたろう、
ここの戸は閉つておらず、右に三軒、左に二軒、両側の長屋はも
う夜中で、明い屋根あり、暗い軒あり、影は溝板の処々、その
家もここも寂寥して、ただ一つ朗かな蚯蚓の声が月でも聞くと
思ふのか、鳴いている。

この裏を行^{ゆきぬ}抜けの正面、霧の綾^{あや}も遮^さらず目の届く処に角が立つた青いものの散^{ちらば}ったのは、一軒飛離れて海苔粗^{のりそだ}朶の垣を小さく結った小屋で剥^むく貝の殻で、その剥^{むきみ}身屋のうしろに、薄霧のかかった中は、直ちに汽船の通う川である。

ものの景色はこれのみならず、間近な軒のこつちから棹^{さお}を渡して、看護婦が着る真^{まっしろ}白^{うわぎ}な上衣が二枚、しまい忘れたのが夜干^{よぼし}になつて懸^{かか}つていた。

「お化^{ばけ}。」

「ああ、」とばかり、お縫は胸のあたりへ颯^{さつ}と月を浴びて、さし入る影のきれぎれな板敷の上へ坐つてしまうと、

「灯^{あかり}を消しましたね。」とお化^{のんき}の暢気さ。

橋ぞろえ

五

「さあ、おい、起きないか起きないか、石見橋いわみばしはもう越した、不動様の前あたりだよ、直すぐに八幡様だ。」と、縞しまの羽織で鳥打もんつきを冠かぶったのが、胴まの間に円まるくなって寝ている黒の紋着もんつきを揺り起す。

一行三人の乗合のりあいで端に一人仰向けあおむになつて舷ふなばたに肱ひじを懸けたの

が調子低く、

佃々つくだと急いで漕こげば、

潮がそこりて艀ろが立たぬ。

と口くちずさ吟ぎんだ。

けれども實際この船は佃をさして漕ぐのではない。且つ潮がそこるどころの沙汰ではない。昼ひる過すぎからがらりと晴上つて、蛇の目からかさの傘を乾かすような月夜になったが、昨夜ゆうべから今朝へかけて暴風雨らしがあつたので、大川は八分ぶの出水、当深川の川筋は、縦横曲折至る処、潮、満々と湛たたえている、そして早船はやぶね乗の頬ほ冠おかぶりをした船頭は、かかる夜よのひっそりした水に声を立てて艀をぎいぎい。

砂利船、材木船、泥船などをひしひしともや纜はまぐりつてある 蛤 町ちよう

の河岸を過ぎて、左手に黒い板囲い、㊦※※と大きくごふん胡粉で書いた、中空に見上げるような物置の並んだ前を通つて、ほうらい蓬萊橋とばしいうのに懸かつた。

月影に色ある水は橋はし杭くいを巻いてちらちらと、畝うねつて、横堀に浸した数十本の材木が皆動く。

「とっさんここいらで、よく釣つてるが何が釣れる。」

船顎、

「沙魚はぜに鰯おぼこ子が釣れます。」

「おぼこならば釣れよう。」と縞の羽織が笑うと、舷に舷をついたのが向直つて、

「何あてになるものか。」

「遣^やつて御覧^{ごらん}じろ。」と橋の下を抜けると、たちまち川幅が広く

なり、土手が著しく低くなつて、一杯の潮は凸^なに溢^{あふ}れるよう。左^{ひだり}

手^ては洲^すの岬^{みさき}の蘆^{あし}原^{はら}まで一望^{びよう}渺^{ひよう}たる広^{ひろ}場^{つば}、船大工の小屋^{とびと}が飛^と

び々、離々たる原上の秋の草。風が海手からまともに吹きあてる

ので、満潮の河心へ乗つてゐるような船はここにおいて大分揺れる。

「釣れる段か、こんな晩にやあ鰻^{うなぎ}が船の上を渡り越すというくら

いな川じゃ。」と船頭は意気^{すこぶ}頗^{あが}る昂^{あがり}る。

「さあ、心細いぞ。」

「一体この川は何という。」

「名はねえよ。」

「何とかありそうなものだ。」

「石見橋なら石見橋、蓬萊橋なら蓬萊橋、蛤町の河岸なら蛤河岸さ、八幡前、不動前、これが富岡門前の裏になります。」という時、こまがり小曲をして平清ひらせいの植込の下なる暗い処へ入って蔭になった。かわづら川面はますます明い、あかる船こそ数多あるけれども動いているのはこの川にこれただ一艘。そう

「こつちの橋は。」

間近く虹にじのごとく懸かつているのを縞の羽織が聞くと、船頭の答えるまでもなく紋着が、

「汐見橋。」

「寂さみしいな。」

この処の角にして船が弓なりに曲った。寢息も聞えぬ小家^{こいえ}あまた、水に臨んだ岸にひよろひよろとした細くつて低い柳があたかも墓へ手向けたもののよう^はに果敢^{はか}なく植わっている。土手は一面の蘆で、折しも風立つて来たから颯^{さつ}と靡^{なび}き、颯と靡き、颯と靡く反対の方へ漕いで漕いで進んだが、白珊瑚^{しろさんご}の枝に似た貝殻だらけの海苔粗朶^{のりそだうずたか}が堆く棄ててあるのに、根を隠して、薄ら蒼^{あお}い一基の石碑が、手の届きそうな処に人の背よりも高い。

六

「おお、気味悪い。」と舷^{ふなばた}を左へ坐りかわった縞^{しま}の羽織は大いに

悄しよげ氣げる。

「とっさん、何だろう。」

「これかね、寛政子年ねとしの津浪つなみに死骸しがいの固かたままつていた処だ。」

正面に、

葛かつしか飾か郡ごおり 永代築地

と鑄えりつけ、おもてから背後うしろへ草はしりがき書きをまわして、

此このところ 処

寛政三年波あれの時、家流れ人死するもの少からず、

此の後高波の変はかりがたく、溺死できしの難なしというべからず、是これ
に寄りて西入船町を限り、東吉祥寺前に至るまで凡およそ長さ二百八

十間余の所、家居取いえい払い空地となし置くものなり。

と記して傍かたわらに、寛政六年 甲きのえとら寅十二月 日とある石の記念碑

である。

「ほう、水死人の、そうか、謂わば土左衛門塚。」

「おっと船中にてきようなことを、」と鳥打はつむりを縮めて、

「や！」

響くは凄じい水の音、神川橋の下を潜つて水門を抜けて矢を射

るごとく海に注ぐ流の声なり。

「念入だ、恐しい。」と言いながら、寝返の足で船底を蹴つ

たばかりで、未だに生死のほども覚束ないほど寝込んでい

連の男をこの際、十万の味方と烈しく揺動かして、

「起きないか起きないか、酷く身に染みて寒くなった。」

やがて平野橋、一本二本蘆の中に交つたのが次第に洲崎のこ

の辺^{あたり}土手は一面の薄^{すすきばら}原、穂の中から二十日近くのを遠く沖合の空に眺めて、潮が高いから、人家の座敷下の手すりとするずれの処をゆらりと漕いだ、河岸についてるのは川蒸汽で縦に七艘^{そとう}ばかり。

「ここでも人ツ子を見ないわ。」

「それでもちつとは娑婆^{しゃば}らしくなった。」

「娑婆^{しゃば}といやあ、とっさん、この辺で未通子^{おぼこ}はどうだ。」と縞の先生^{いきかえ}生活返^{いきかえ}つていやごとを謂う。

「どうだどころか、もしお前さん方、この加賀屋じゃ水から飛込む魚^{うお}を食べさせるとつて名代^{なだい}だよ。」

「まずそこらで可^よし、船がぐらぐらと来て鰻の川渡りは御免蒙^{こうむ}る

。」

「ここでは欄干から這込みます。」

「まさか。」

「いや何ともいえない、青山辺じやあ三階へ栗が飛込むぜ。」

「大出来！」

船頭も哄と笑い、また、

佃々と急いで漕げば、

潮がそこりて艀が立たぬ。

程なく漕ぎ寄せたのは弁天橋であつた、船頭は舳へ乗かえ、棹を引いて横づけにする、水は船底を嘗めるようにさらさらと引いて石垣へだぶり。

「当りますよ。」

「活きてるか、これ、」

二度まで揺^ゆられても人心地のないようだった一名は、この時わけもなくむつくと起きて、真^ま先に船から出たのである。

「待て、」といいつつ兩人、懷をおさえ、褌^{つま}を合わせ、羽織^{ひも}の紐^{ひも}をメ^メ《し》めなどして、履物を穿^はいてばたばたと陸^{おか}へ上^{あが}つて、一^ひと^とかたまり^とになると三人言い合せたように、

「寒い。」

「お静^{しずか}に。」といつて、船頭は何か取ろうとして胴の間の処^うへ俯^う向^むく。

途端であつた。

耳許みもとにドンと一発、船頭も驚いてしやつきり立つと、目の前さきへ、火花が糸を引いて※ぼつと散つて、川面かわづらで消えたのが二ツ三ツ、不意に南京なんきん火花を揚げたのは寝ていたかの男である。
 斉ひとしく左右へ退いて、呆気あつけに取られた連つれの両人ふたりを顧みて、呵からか
 々と笑つてものをいわず、真先まつききに立つて、
 鞭声べんせい肅々——

題目船

七

「何じやい。」と打棄うつちやつたように忌々いまいましげに呟つぶやいて、頬ほおかぶ
冠りを取つて苦にがわらい笑をした、船頭は年とし紀六十ばかり、瘦やせて目
鼻かどに廉かどはあるが、一癖も、二癖も、額まなじり、眦くちもと、口許しわの皺しわに隠れて
しおらしい、胡麻塩ごましおの元頭はげあたま、見るから仏になつてるのは佃町
のはずれに独住居ひとりずまいの、七兵衛という親仁おやじである。

七兵衛——この船頭ばかりは、仕事の了しまいにも早船をここへ繋つないで
戻りはせぬ。

毎夜、弁天橋へ最後の船を着けると、後へ引返ひつかえしてかの石碑
の前を漕こいで、蓬萊橋まで行つてその岸の松の木に纏もやつておいて
上あがるのが例ならいで、風雨はげの烈はげしい晩、休む時はさし措おき、年月夜ごと

にきつとである。

且つ仕舞船を漕ぎ戻すに當つては名代の信者、法華經第十六壽じ
ゆりようぼん量品の偈げ、自我得仏来じがとくぶつらいというはじめから、速成就そくじようじゆぶつし仏

身んとあるまでを幾度いくたびとなく繰返す。連夜の川かわ施餓鬼せがきは、善か

悪か因縁があろうと、この辺では噂うわさをするが、十年は一昔、二昔

も前から七兵衛を知つてゐるものも別に仔細しさいというほどのことを見

出さない。本人も語らず、またかかる善根功德、人が咎とがめるところ

の沙汰さたではない、もとより起居に念仏を唱える者さえある、船

で題目を念ずるに仔細は無かろう。

されば今宵こよいも例に依つて、船の舳へさきを乗返した。

腰ひねを捻ひねつて、艫ろづか柄を取つて、一ツおすと、岸を放れ、

「ああ、良い月だ、みようほうれんげきようによらい 妙法蓮華經如来 寿量品第十六自我得仏
来、しよきようしよごうすう 所經諸劫数、むりようひやくせんまんおくさいあそうぎ 無量百千万億載阿僧祇、」と誦じゆ
はじめた。風も静しずかに川波の声も聞えず、更け行くにつれて、三押みおし

に一度、七押に一度、ともすれば響く艫の音かな。

「じようせつぽうきようげむすうおくしゆじようじらいむりようごう 常説法教化無数億衆生爾来無量劫。」

法の声は、蘆あしを渡り、柳に音ずれ、蟋蟀きりぎりすの鳴き細る人の枕
に近づくのである。

本所ならば七不思議の一ツに数えよう、月夜の題目船だいもくふね、一人
船頭。界限かいわいの人々はそもいかなの感を起す。苦家とまや、伏家ふせやに灯の
影も漏れない夜よはさこそ、朝々の煙も細くかの柳を手向けられた
墓のごとき屋根の下には、子なき親、夫なき妻、乳のない嬰兒みどりご、

めくら おうな 盲目の媼、継母、よりあいしんしょう 寄合身上で女ばかりで暮すなど、あわれ 哀に果敢
ろうにやくなんによ ない老若男女が、見る夢も覚めた思いも、大方この日が照る
 世の中のことではあるまい。

ひげ 髯ある者、くるま 腕車を走らす者、がいとう 外套を着たものなどを、おなじ 同一世

に住むとは思わず、はらから 同胞であることなどは忘れてしまつて、憂

きことを、憂しと識別することさえ出来ぬまで心身ともに疲れ果

てたその家この家に、かくまでに尊い音楽はないのである。

しゅじょうきしんぷくしちじきにゆうなん 「衆生既信伏質直意柔軟、いつしんよくけんぶつ 一心欲見仏、ふじじやくしん 不

みよう 身命、」と親仁は月下に小船を操る。

諸君が随処、淡路島通う千鳥の恋の辻つじうら占うらというのを聞か

時、七兵衛の船は石碑のある処へ懸かつた。

いかなる人がこういう時、この声を聞くのであるか？　ここに適例がある、富岡門前町のかのお縫が、世話をしたというから、菊枝のことについて記すのにちつとも縁がないのではない。

幕府の時分旗本であつた人の女で、むすめとある楼に身を沈めたのが、この近所に長屋を持たせ廓くるわ近くへ引取つて、病身な母親と、長煩いで腰の立たぬ父親とを貢いでいるのがあつた。

八

少なからぬ借金で差引かれるのが多いのに、かせぎだか稼高の中から渡される小遣こづかいは髪結かみゆいの祝儀にも足りない、ところを、たとい

おも湯にしる両親が口を開けてその日その日の仕送しおくりを待つのであるから、一月と纏まとめてわずかばかりの額ではないので、毎々借かりこし越こしにのみなるのであったが、暖簾名のれんなの婦人おんなと肩を並べるほど売れるので、内証にくで悪い顔もしないで無心に応じてはいたけれども、応ずるは売れるからで、売るのには身をもつて勤めねばならないとか。

いかに孝女でも悪所において斟しん酌やくがあらうか、段々身体からだを衰えさして、年とし紀はまだ二十二というのに全盛の色もやや褪あせて、素顔では、と源平の輩やからに遠慮をするようになると、二度三度、月の内に枕が上らない日があるようになった。

扱しご帯きの下を氷で冷すばかりの容体を、新造しんぞが枕まくら頭もとに取詰め

て、このくらいなことで半日でも客を断るということがありますか、死んだ浮舟なんぞ、手拭^{てぬぐい}で汗を拭^ふく度に肉が殺^そげて目に見えて手足が細くなつた、それさえ我儘をさしちやあおきませなんだ、貴女は御全盛のお底^{かげ}に、と小刀針^{こがたなばり}で自分が使う新造^{もの}にまでかかることを言われながら、これにはまた立替えさしたのが、控帳についてるので、悔しい口も返されない。

という中にも、随分気の確^{たしか}な女、むずかしく謂えば意志が強いという質^{たち}で、泣かないが蒼^{あお}くなる風だつたそうだから、辛抱はするようなもの、手元^{つま}が詰^つまるに従うて謂うまじき無心の一つもいふようになると、さあ鰯^{どじょうにげ}は遁^うる、鰻^{うなぎ}は^{すべ}る、お玉杓子^{たまじやくし}は吃驚^{びつくり}する。

河岸は不漁で、香のある鯛なんぎ、廓までは廻らぬから、次第々々に隙にはなる、融通は利かず、寒くはなる、また暑くはなる、^{とし}年紀は取る、手拭は染めねばならず、夜具の皮は買わねばならず、裏は天地で間に合つても、襦袢の色は変えねばならず、茶は切れる、時計は留る、小間物屋は朝から来る、朋輩は落籍のがある、内証では小児が死ぬ、書記の内へ水がつく、^{たいこもち}幫間がはな会をやる、相撲が近所で興行する、それ目録だわ、つかいものだ、見舞だと、つきあいの雑用を取るだけでも、痛む腹のいいわけは出来ない仕誼。

随分それまでにもかれこれと年季を増して、二年あまりの地獄の苦がフイになつてゐる上へ、もう切迫と二十円。

盆のことで、両親の小屋へ持つて行つて、ものをいう前にまず、
 お水ひやを一口という息切いきぎれのする女むすめが、とても不可いけません、済すまない
 こツてすがせめてお一人だけならばと、張はりも意気地もなく母親の
 帯につかまつて、別わかれぎわ際むすめに忍しのびなき泣なに泣いたのを、寝ていると
 思つた父親が聞き取つて、女むすめが歸つて明くる日も待たず自殺した。
 報知しらせを聞くと斉ひとしく、女むすめは顔の色が變つて目くぼが窪くぼんだ、それな
 りけり。砂利へ寝かされるような蒲団ふとんに倒れて、乳房の下に骨が
 見える煩い方。

肺病のある上へ、驚いたがきつかけとなつて心臓を痛めたと、
 医者が匙さじを投げてから内証は証文を卷いた、但し身附の衣類諸道
 具は編笠あみがさいっかい一蓋と名づけてこれをぶつたくり。

手当も出来ないで、ただ川のへりの長屋に、それでも日の目が
 拝めると、北枕に水の方へ黒髪を乱して倒れている、かかる者の
 夜更けて船頭の読経を聞くのは、どんなに悲しかろう、果敢^{はか}な
 ろう、情^{なさけ}なかりう、また嬉しかろう。

「妙法蓮華經如来寿量品第十六自我得仏来所經諸劫数無量百千万
 億載阿僧祇。」と誦^{じゆ}するのが、いうべからざる一種の福音を川^{かわづ}
 面に伝えて渡った、七兵衛の船は七兵衛が乗って漂々然。

九

蓬萊橋は早や見える、折から月に薄雲がかかったので、野も川

も、船頭と船とを淡く残して一面に白み渡った、水の色は殊にや
や濁にごりを帯びたが、果はてもなく洋々として大河のごとく、七兵衛はさ
ながら棲息せいそくして呼吸するものがない、月世界の海を渡るに斉ひとし
い。

「妙法蓮華經如来寿量品。」と繰返したが、聞くものの魂ふなばたが舷はたの
あたりにさまようような、ものの怪けが絡まつわったか。烏が二声ばかり
啼ないて通った。七兵衛は空を仰いで、

「曇つて来た、雨返しがありそうだな、自我得仏来所經、」とな
だらかにまた頓とんじやく着やくしない、すべてのものを忘れたという音調
で誦じゆするのである。

船は水面を横に波状動を起して、急に烈はげしく揺れた。

読経をはたと留め、

「やあ、やあ、かしが、」と呟つぶやきざま艫ともを左へ漕こぎ開くと、一二ふたす

条糸じを引いて斜ななめに描かれたのは電いなづまの裾すそに似たる綾あやである。

七兵衛は腰を撓ためて、突つ立つて、逸い疾ちく一間ばかり遣違やりちがえ

に川下へ流したのを、振返みづつてじつと瞋みづめ、

「お客様だぜ、待て、妙法蓮華經如来寿量品第十六。」と忙せわしく

張上げて念じながら、舳へさきを輪すべなりに迂すべらして中流で逆に戻して、

一息ぐいさざなみと入さざなみれると、小波さざなみを打乱す薄月に影あるものが近ちかづいて、

やがて舷にすれすれになった。

飛下りて、胴の間に膝をついて、白髪天頭しらがあたまを左右に振ったが、

突然いきなり水中へ手を入れると、朦朧もうろうとして白く、人の寝姿に水の

懸^かつたのが、一揺^ゆ静^れに揺れて、落着いて二三尺離れて流れる、途端に思うさま半身を乗出したので反対の側なる舷へぎぶりと一^{ひと}波浴^{みあび}せたが、あわよく手先がかかったから、船は人とともに寄つて死骸に密接することになった。

無意識に今掴^{つか}んだのは、ちようど折曲げた真白^{まっしろ}の肱^{ひじ}の、鍵^{かぎ}な形に曲つた処だったので、

「しやつちこばツたな、こいつあ日なしだ。」

とそのまま乱暴に引上げようとすると、少しく水を放れたのが、柔かに伸びそうな手^て答^{こたえ}があつた。

「どツこい。」驚いて猿臂^{えんぴ}を伸^のび、親仁^{おやじ}は仰向^{あおむ}いて鼻筋^{しわ}に皺^{しわ}を寄せつつ、首尾よく肩のあたりへ押廻して、手を潜^{くぐ}らし、搔い込ん

で、ずぶずぶと流ながれを切つて引上げると、びつしより舷へ胸をのせて、俯うつむ向けになつたのは、形も崩れぬ美しい結ゆい綿わたの島田まげ髷。身を投げて程も無いか、花がけにした鹿かの子の切きれも、沙魚はぜの口へ啣くはえ去られないで、解ほどけて頸うなじから頬の処へ、血が流れたようにベツとりとついている。

親仁は流に攫さらわれまいと、両手で、その死体の半なかばははまだ水に漂つてゐるのをしっかり押えながら、わなわなと震えて早口に経を唱えた。

けれどもこれは恐れたのでも驚いたのでもなかつたのである。助かるすべもありそうな、見た処の一枝の花を、いざ船に載せて見て、咽喉のどを突かれてでも、居はしまいか、鳩みず尾おちに斬きつたあと

でもあるまいか、ふと愛あいじやく惜とどろの念盛さかんに、望のぞみの糸すがに縋りついたか
ら、危ぶんで、七兵衛は胸が轟とどろいて、慈悲の外何の色をも交えぬ
老おいまなこふさの眼は塞いだ。

またもや念ずる法華經の偈げの一ひと節ふし。

やがて曇った夜の色を浴びながら満水して濁った川は、どんと
船を突上げたばかりで、忘れたようにその犠にえを七兵衛の手に残し
て、何事もなく流れ流るる。

衣の雫

十

待乳屋の娘菊枝は、不動の縁日にといつて内を出た時、沢山あ
 る髪を結綿ゆいわたに結っていた、角絞りの鹿かの子の切き、浅葱と赤と
 二筋を花がけにしてこれが昼過ぎに出来たので、衣服きものは薄お納戸
 の棒縞ぼうじま糸織あわせの袷すそ、薄紫の裾廻し、唐繻子とうじゆすの襟を掛かけて、赤地に
 白菊の半襟、緋鹿ひがの子の腰巻、朱鷺色ときいろの扱帯しごきをきりきりと巻いて、
 萌黄繻子もえぎじゆすと緋の板じめ縮緬ちりめんを打合せの帯、結目むすびめを小さく、心
 を入れないで帯上おびあげは赤の菊五郎格子、帯留おびどめも赤と紫との打交
 ぜ、素足すみせんに小町下駄はを穿はいてからからと家うちを。

一体三味線屋さみせんで、家業柄出入るものにつけても、両親は派手好はでずき

なり、殊に蟲貞俳優ひいきやくしやの橘之助の死んだことを聞いてから、始終くよくよして、しばらく煩つてまでいたのが、その日は誕生日で、気分も平日いっになく好いいというので、髪も結つて一枚着換えて出たのであつた。

小町下駄は、お縫とこが許あがりの上まち 框の内に脱いだまま居なくなつたのであるから、身を投げた時は跣足はだしであつた。

履物が無かつたばかり、髪も壊れず七兵衛が船に助けられて、夜よがあけると、その扱帯もその帯留も、お納戸の衾も、萌黄と緋の板締いたじめの帯も、荒縄に色を乱して、一つも残らず、七兵衛が台所こにずらりと懸かつて未だ雫いまずくも留まらないで、引窓から朝霧の立ち籠こむ中に、しとしと落ちて、一面に朽ちた板敷ぬらを濡ぬしているの

は潮の名残。なごり

可惜、あたら鼓のしらべの緒にでも干す事か、縄をもつて一方から引

窓の紐にかけ渡したのは無慙であるが、むざん親仁が心は優しかった。

引窓を開けたばかりわざと勝手の戸も開けず、かどぐち門口も閉めた

ままで、なべ鍋をかけた七輪の下を煽ぎながら、大入だの、こよみ暦だの、

姉さんだのを張交ぜにした二枚折のまくらびようぶ枕屏風の中を横から振向

いて覗き込み、

「姉や、ねえ気分はどうじゃの、少し何かが解わかつて来たか、」

とまとも的面にこつちを向いて、眉の優しい生はえぎわ際の濃い、鼻筋の通

つたのが、何も思わないような、しかも限りなき思を籠めた鈴の

ような目を瞠みはつて、うりぎねなり瓜核形の顔ばかり出して寝ているのをなが視め

て、大口を開あいて、

「あはは、あんな顔をして罪のない、まだ夢じやと思うそうだ。」

菊枝は、硫黄いおうヶ島の若布わかめのごとき檻樓蒲団ぼろぶとんにくるまつて、拔ぬきわ

綿たの丸まろげたのを枕まくらにしている、これさえじかげであるのに、

親仁が水でも吐はしたせい、船へ上げられた時よりは髪がひつ潰つぶ

れて、今もびつしよりで哀あわれである、昨夜ゆうべはこの雫の垂るる下で、

死際の蟋きりぎりす蟀せむしが鳴いていた。

七兵衛はなおしらしい目から笑えみを溢こぼして、

「やれやれ綺麗きれいな姉さんが台なしになったぞ。あてこともねえ、

どうじゃ、切ないかい、どこぞ痛みはせぬか、お肚なかは苦しゅうな

いか。」と自分の胸を頑固にぎりこぶしな握拳こぶしでこツこツと叩いて見せる。

ト可愛らしく、口を結んだまま、ようようこの時頭^{かぶり}を振った。

「は、は、痛かあない、宜^いいな、嬉しいな、可^よし、可^よし、そりや
こうじやて。お前^{めえ}、飛込んだ拍子に突^{いきなり}然目でも廻したか、いや、
水も少しばかり、井に一杯吐いたか吐かぬじや。大したことはね
えての、気さえ確^{たしか}になれば整然^{ちやん}と治る。それから、ここは大事
ない処^{ばば}じや、婆も猫も犬も居^おらぬ、私^{わし}一人じやから安心をさつし
やい。またどんな仔細^{しさい}がないとも限らぬが、少しも氣遣^{きづかい}はない、
無理に助けられたと思うと氣が揉^もめるわ、自然天然と活返^{いきかえ}った
ところするだ。可いか、活返ったら夢と思つて、目が覚めたら、」
といいかけて、品のある涼しい目をまた凝視^{みつ}め、

「これさ、もう夜があけたから夢ではない。」

十一

しばらくして菊枝が細い声、

「もし」

「や、産^{うぶごえ}声を挙げたわ、さあ、安産、安産。」と嬉しそうに乗

出して膝を叩く。しばらくして、

「ここはどこでございますえ。」とほろりと泣く。

七兵衛は笑^{えみかたむ}傾^{かたむ}け、

「旨^{うま}いな、涙が出ればこつちのものだ、姉^{ねえ}や、ちつとは落着いたか、気が静まったか。」

「ここはどっちでしょう。」

「むむ、ここはな、むむ、」と独ひとりでほくほく。

「散々気を揉もんでお前めえ、ようようこつちのものだと思つと、何を言つてもただもうわなわな震えるばかりで。弱らせ抜いたぜ。

そつちから尋ねるようになれば占めたものだ。ここは佃町よ、八幡様の前を素直まっすぐに蓬莱橋を渡つて、広ッ場ばを越した処だ、可いいか、私わしは早船の船頭で七兵衛と謂いうのだ。」

「あの蓬莱橋を渡つて、おや、そう、」と考える。

「そうよ、知つてるか、姉やは近所かい。」

「はい。……いいえ、」といつてフト口をつぐんだ。船頭は胸で合がつてん点して、

「まあ、可いや、お前の許めえとこは構わねえ、お前の方にさえ分れば可いわ、佃町を知っているかい。」

ややあつて、

「あの、いつか通つた時、私くらいな年とし紀の、綺麗な姉さんが歩あ行るいていなすつた、あすこなんでしょう、そうでございますか。」

「待たツせよ、お前めえくらいな年とし紀で、と、こうと十六七だな。」

「はあ、」

「十六七の阿魔あまはいくらかも居るが、綺麗な姉さんはあんまりねえぜ。」

「いいえ、いますよ、丸顔のね、髪たんとの沢山ある、そして中形の浴衣を着て、赤い襦じゆばん袢ばんを着ていました、きつとですよ。」

「待ちねえよ、赤い襦袢と、それじゃあ、お勤が家とこに居る年明ねんあきだろう、ありやお前めえもう三十くらいだ。」

「いいえ、若いんです。」

七兵衛天窓あたまを搔かいて、

「困らせるの、年月も分らず、日も分らず、さっぱり見当が着かねえが、」と頗すこぶる弱よわつたらしかつたが、はたと膝を打って、

「ああああ居た居た、居たが何、ありや売物よ。」と言つたが、菊枝には分らなかつた。けれども記憶を確めて安心をしたものと見え、

「そう、」と謂つた声がうるんで、少し枕を動かすと、顔を仰向けにして、目を塞ふさいだがまた涙ぐんだ。我に返れば、さまざまの

こと、さまざまのことはただうら悲しきのみ、疑^{うたが}も恐^{おそ}れもなくつて泣くのであつた。

髪も揺めき蒲団も震うばかりであるから、仔細^{しさい}は知らず、七兵衛はさこそとばかり、

「どうした、え、姉やどうした。」

問^{とい} 慰^{なぐさ}めるとようよう此方^{こなた}を向いて、

「親方。」

「おお、」

「起きましようか。」

「何、起きる。」

「起きられますよ。」

「占めたな！ お前^{めえ}じつとしてる方が可いけれど、ちつとも構わねえけれど、起^{おき}られるか、遣^やつてみろ一番、そうすりやしやんしやんだ。気さえ確^{たしか}になりや、何お前案じるほどの容体じゃあねえんだぜ。」と、七兵衛は孫をつかまえて歩行^{あんよ}は上手の格で力をつける。

蒲団の外へは顔ばかり出していた、裾^{すそ}を少し動かしたが、白い指をちらりと夜具の襟へかけると、顔をかくして、

「私、……………」

十二

「大事ねえ大事ねえ、水浸しになつていた衣服はきものお前めえあの通だ、聞かつせえ。」

時に絶えず音するはしずか静な台所の点したたり滴である。

「あんなものを巻着けておいた日にやあ、骨まで冷ひえぬ抜いてしまうからよ、私わしがどんつく襦まくらもと袍まくらもとを枕まくらもと許ひつかに置いてある、誰も居ねえから起きるならそこで引被ひつかけねえ。」

といったが克明な色面おもてあらわにきづかい顕れ、

「おお、そして何よ、憂慮きづかいをきつしやるな、どうもしねえ、何

ともねえ、俺あおら頸くび子たまにも手を触りやしねえ、胸を見な、不動様のお守札が乗つけてあら、そらの、ほうら、」

菊枝は嬉しそうに血の氣のない顔に淋しい笑えみを含んだ。

「むむ、」と頷うなずいたがうしろ向むきになって、七兵衛は口を尖とんがらかして、鍋なべの底を下から見る。

屏風びょうぶの上へ、肩のあたりが露あらわれると、潮たれ髪はなお乾かず、動くに連れて柔かにがつくりと傾くのを、軽く振って、根おきを圧えて、

「これを着ましようかねえ。」

「洗濯をしたばかりだ、船虫は居ねえからよ。」

緋ひがのこ鹿子の上へ着たのを見て、

「待つせえ、あいにく襷がねえ、私がこの一張羅の三尺じゃあ間に合うめえ！」と、可^よかろう、合したものの上へ《し》めるんだ、濡れていても構うめえ、どっこいしょ。」

七兵衛は^{ぼった}のような足つきで不行儀に突立つと屏風の前を一^ひ

跨^{とまたぎ}、直に台所へ出ると、荒縄には秋の草のみだれ咲、小雨が

降るか^{もえぎ}と霧かかつて、帯の端衣服^{きもの}の裾^{すそ}をしたしたと落つる雫^{しずく}も、

萌黄^{もえぎ}の露、紫の露かと見えて、慄然^{ぞっ}とする朝寒^{あささむ}。

真中^{まんなか}に際立って、袖も襟も萎^なえたように懸^かっているのは、斧^{よき}、

琴、菊を中形に染めた、朝顔の秋のあわれ花も白地の浴衣である。

昨夜船^{ゆうべ}で助けた際、菊枝^{あわせ}は衾^{あわせ}の上へこの浴衣を着て、その上に、

菊五郎格子^{くく}の件^{くだん}の帯^{おび}上^{あげ}を結んでいたの。

謂^{いわれ}は何かこれにこそと、七兵衛はその時から怪^{あやし}んで今も真^ま前^{まさき}に目を着けたが、まさかにこれが死神で、菊枝を水に導いたものとは思わなかつたであらう。

実際お縫は葛籠^{つづら}の中を探して驚いたのもこれ、眉^{ひそ}を顰^{ひそ}めたのもこれがためであつた。斧と琴と菊模様の浴衣こそ菊枝をして身を殺^{ころ}さしめた怪^きしの衣^{きぬ}、女^{むすめ}が歌舞伎の舞台でしばしば姿を見て寐^ね覚^{さめ}にも倂^{おもかげ}の忘れぬ、あこがるるばかり鼻^{ひい}眞^きの俳^{やく}優^{しや}、尾上橘之助が、白菊の辞世を読んだ時まで、寝返りもままならぬ、病^{やまい}の床に肌につけた記念^{かたみ}なのである。

江崎のお縫は芳原の新造^{しんぞ}の女^{むすめ}であるが、心^{こころ}懸^{がけ}がよくツて望んで看護婦になつたくらいだけれども、橘之助に附添つて嬉しく

ないことも無いのであつた。

しかるに重体の死に瀕ひんした一日、橘之助が一輪ざしに菊の花を
活けたのを枕まくらもと頭に引寄せて、かつてやんごとなき某侯爵夫人
から領したという、浅あさみどり緑と名のある名香めいこうを、お縫の手で焚た
いてもらい、天井から釣つるした氷ひょうのう囊とりのを取除けて、空氣枕に仰向ふとん
けに寝た、素顔は舞台のそれよりも美しく、蒲団ふとんも搔かい卷まきも真まつし
白ろな布をもつて蔽おほえる中に、目のふちのやや蒼あおざめながら、額
にかかる髪の艶つや、あわれうらわかき神のまぼろしが梨園を消えよ
うとする時の風情。

橘之助は垢あかの着かない綺麗な手を胸に置いて、香こうの薰かおりを聞いていたが、一縷いちるの煙は二一条ふたすじに細く分れ、尖さきがささ波のようにひらひらと、靡なびいて枕かかに懸かつた時、白菊の方に枕を返して横になって、弱々しゅう襟を左右に開いたのを、どうなさいます？ とお縫が尋ねると、勿体ないが汗臭いから焚たき占めましょう、と病苦の中に謂いつたという、香の名残なごりを留めたのが、すなわちここに在ある記か念たみの浴衣。

懐ゆかししくも床ゆかしさに、お縫は死骸の身に絡まとつた殊にそれが肺結核の患者であつたのを、心得ある看護婦でありながら、記念かたみにと謂いつて強いて貰い受けて来て葛籠つづらの底深く秘め置いたが、菊枝がかね

て橘之助びいき鼻^{びいき}肩^{びいき}で、番附に記した名ばかり見ても顔色を変える騒^{さわ}ぎ^ぎを知つてたので、昨夜、不動様の参詣さんけいの歸りがけ、年紀とし下ながら仲よしの、姉さんお内かい、と寄つた折も、何は差置き橘之助の噂うわさ、お縫は見たままを手取るよう。

これこれこう、こういう浴衣と葛籠の底から取出すと、まあ姉さんと進むる膝、灯あかりとともに乗出す膝を、突合した上へ乗せ合つて、その時はこういう風、仏におなりの前だから、優しいばかりか、目許めもと口付、品があつて気高うてと、お縫が謂えば、ちらちらと、白菊の花、香の煙。

話が嵩こそうじて理に落ちて、身に沁しみて涙になると、お縫はさすがに心着いて、鮎すしを驕おごりましてうといつて戸外おもてへ出たのが、葦あしの湯

の騒ぎをつい見棄てかねて取合つて、時をうつしていた間に、過^す世^{ぐせ}の深い縁であらう、浅緑の薫のなお失^うせやらぬ橘之助の浴衣を身につけて、跣^{はだし}足で、亡き人のあとを追つた。

菊枝は屏風の中から、ぬれ浴衣を見てうつとりしている。

七兵衛はさりととも知らず、

「どうじやメ《し》めるものはこの扱^{しごき}帯が可いかの。」

じつと凝視^{みつ}めたまま、

だんまりなり。

「ぐるぐる巻^{まき}にすると可い、どうだ。」

「はい取つて下さいまし、」とやつといったが、世^よ馴^なれず、両^{ふた}手^お親^やには甘やかされたり、大恩人に対し遠慮の無さ。

七兵衛はそれを莞爾にこやかに、

「そら、こいつあ単衣ひとえだ、もう雫しずくの垂るようなことはねえ。」

やがて、つくづくと見て苦笑い、

「ほほう生れかわって娑婆しゃばへ出たから、争われねえ、島田の姉さんがむつぎにくるまつた形なりになった、はははは、縫上げをするように腕をこうぐいと遣やらかすだ、そう、そうだ、そこで坐つた、と、何ともないか。」

「ここが痛うございますよ。」と両手を組違えに二の腕をおさえて、頭つむりが重そうに差俯さしうつむ向く。

「むむ、そうかも知れねえ、昨夜ゆうべそうやってしつかり胸を抱いて死んでたもの。ちようど痛むのは手の下になってた処よ。」

「そうでございますか、あの私はこうやって一生懸命に死にましたわ。」

「この女は！　一生懸命に身を投げる奴やつがあるものか、串じょうだん戯ごじゃあねえ、そして、どんな心持だった。」

「あの沈みますと、ぼんやりして、ずっと浮いたんですわ、その時にこうやって少し足を縮めましたっけ、また沈みました、それから知りませんよ。」

「やれやれ苦しかったろう。」

「いいえ、泣きとうございました。」

記念ながら

十四

二ツ三ツ話の口が開けると老功の七兵衛ちつとも透さず、
「何しろ娑婆へ帰つてまず目出度、そこで嬰兒は名は何と謂う、
お花か、お梅か、それとも。」

「ええ、」といいかけて菊枝は急に黙ってしまった。

様子を見て、七兵衛は氣を替えて、

「可いや、まあそんなことは。ところで、粥が出来たが一杯どう
じや、またぐつと力が着くぜ。」

「何にも喰べられやしませんわ。」と膠にべの無い返事をして、菊枝は何か思出してまた漚さめざめ然とするのである。

「それも可いよ。はは、何か謂われると気に障うるさつて煩わづいな？　可いや、可いやお前になつてみりや、盆も正月も一いちどき齊じじゃ、無理はねえ。

それでは御免蒙こうむつて、私わしは一膳いちぜん遣附やつけるぜ。鍋なべの底はじりじりいう、昨夜ゆうべから氣を揉もんで酒の虫は揉殺もころしたが、矢鱈やたら無性むしょうに腹が空いた。」と立つたり、居たり、歩行あるいたり、果はては胡坐あぐらかいて能代のしろの膳の低いのを、毛脛けずねへ引挟ひつばさむがごとくにして、紫蘇しその実に糖蝦あみの塩しお辛から、畳いみ鰯いわしを小皿にならべて菜ツ葉の漬物うずたか堆く、白々と立つ粥の湯氣の中に、真赤まっかな顔をして、熱いのを、大きな

ごろはちぢやわん
五郎八茶碗でさらさらと掻食^{かつくら}つて、掻食いつつ菊枝が支えか

ねたらしく夜具に額をあてながら、時々吐息を深くするのを、茶碗の上から流^{ながしめ}眊^{そつ}に密と見ぬように見て釣込まれて肩で呼吸^{いき}。

思出したように急がしく掻込^{かつこ}んで、手拭^{てぬぐい}の端^{はじ}でへの字に皺^{しわ}を

刻んだ口の端^{はた}をぐいと拭^ふき、差置いた箸^{はし}も持直さず、腕を組んで

傾^{かたむ}いていたが、台所を見れば引窓から、門口^{かどぐち}を見れば戸^{すき}の透か

ら、早や九時十時の日ざしである。このあたりこそ氣勢^{けはい}もせぬが、

広場一ツ越して川端へ出れば、船の行交^{ゆきか}い、人通り、烟突^{えんとつ}の煙、

木場の景色、遠くは永代、新大橋、隅田川の模様なども、同一時^{おんなじ}

刻の同一頃が、親仁^{おやし}の胸に描かれた。

「姉^{ねえ}や、姉^{ねえ}や、」と改めて呼びかけて、わずかに身を動かす背^{そびら}に

手を置き、

「道理じゃ、善いいにしろ、悪いいにしろ、死のうとまで思つて、一い旦たん水の中で引取つたほどの昨夜ゆうべの今じゃ、何か話しかけられても、胸へ落着かねえでかえつて頭痛でもしちやあ悪いや、な。だから私わしあ何にも謂わねえ。

一体昨夜ゆうべお前めえを助けた時、直ぐ騒ぎ立てればよ、汐見橋の際には交番もあるし、そうすりや助けようと思ふ念は届くしこつちの手は抜けるというもんだし、それに上を越すことは無かつたが、いやいやそうでねえ、川へ落ちたか落されたかそれとも身を投げたか、よく見れば様子で知れらあ、お前は覚悟をしたものだ。

覚悟をするには仔細しさいがあろう、幸いことか悲しいことか、そこ

ン処は分らねえが、死のうとまでしたものを、私が騒ぎ立つて、江戸中知れ渡つて、捕つかちやあならねえものに捕るか、会つちやあならねえものに会つたりすりや、余計な苦患くげんをさせるようなものだ。」七兵衛は口軽に、

「ところ思つての、密そつと負おぶつて来て届かねえ介抱を試みたが、いや半間はんまな手が届いたのもお前めえの運よ、こりや天道様のお情なさけというもんじや、無駄にしては相済まぬ。必ず軽かるはずみ忽たちなことをすまいぞ、むむ姉や、見りや両ふた親おやも居なさろうと思われら、まあよく考えてみさせえ。

そこで胸を静めてじつと腹を落着けて考えるに、私が傍わしそばに居ては氣を取られてよくあるめえ、直ぐにこれから仕事に出て、
蝸まいま

いづろ
牛の殻をあけるだ。可^よしか、棧敷^{さじき}は一日貸切だぜ。」

十五

「起きようと寝ようと勝手次第、お飯^{まんま}を食べるなら、冷飯^{おひや}があるから茶漬にしてやらっせえ、水^{みづ}を一手桶^{ておけ}汲んであら、可^いいか、そしてまあ緩^{ゆっくり}々と思案をするだ。

思案をするじゃが、短気な方へ向くめえよ、後生だから一番方角を暗剣殺に取違えねえようにの、何とか分別をつけさせえ。

幸^{しあわせ}福と親御の処へなりまた伯父御叔母御の処へなり、帰るよ

うな気になったら、私^{わし}に辞儀も挨拶^{あいさつ}もいらねえからさっさと帰

りねえ、お前が知^{めえ}つてるといふ蓬薬橋は、広^{ひろ}場^{つば}を抜けると大きな松の木と柳の木が川ぶちにある、その間から斜^{はす}向^{かい}に向うに見えらあ、可^いいかい。

また居ようと思うなら振^{ふり}方^{かた}を考えるまで二日でも三日でも居させえ、私^{わし}ン処^こはちつとも案ずることはねえんだから。

その内に思案して、明^{あか}して相談^{さうだん}をして可^いいと思^いつたら、謂^いつて見^みさせえ、この皺^{しわ}面^{づら}あ突出^{しゅつしゅ}して成ることなら素^そツ首^{くび}は要^いらねえよ。

私^{わし}あしみじみ可愛^{かわい}くつてならねえわ。

それからの、ここに居る分にやあうっかり外へ出^でめえよ、実は

、
「

と声を密め^{ひそ}ながら、

「ここいらは廓^{くるわ}外^{そと}で、お物見下のような処だから、いや遣手^{やりて}

だわ、新造^{しんぞ}だわ、その妹だわ、破落戸^{ごろつき}の兄貴だわ、口入宿^{くちいれやど}だわ、

慶庵だわ、中にやあお前^{かどわか}勾^し引をしかねえような奴等^{でいり}が出入^{でいり}

をすることがあるからの、飛んでもねえ口に乗せられたり、猿^{さるぐ}

轡^{つわ}を嵌め^はられたりすると大変だ。

それだからこうやって、夜夜中^{よなか}開^{あけ}放^つしの門も閉めておく、

分ったかい。家^{うち}へ帰るならさっさと帰らっせえよ、俺^{わし}にかけかま

いはちつともねえ。じゃあ、俺は出懸けるぜ、手足^{のぼ}を伸して、思

うさま考えな。」

と返事は強くないので、七兵衛はずいと立って、七輪の前へ来

ると、蹲しゃがんで、力なげに一服吸つて三服目をはたいた、駄だろくばり六張
の真しんちゆう鍬くわの煙管きせるの雁首がんくびをかえして、突ついて火を寄せて、二ツ
提さげの煙草入たばこいれにコツンと指し、手拭てぬぐいと一所にぐいと三尺に挟ん
で立上り、つかつかと出て、まだ雪しずくの止まぬ、びしよ濡ぬれの衣を振
返つて、憂慮きづかわしげに土間に下りて、草履つを突かけたが、立淀たちよどんで、
やがて、その手拭を取つて頬ほ被おかぶり。七兵衛は勝手の戸をがらり
と開けた、台所は昼になつて、ただ見れば、裏手は一面の蘆原あしはら、
処々に水溜たまり、これには昼の月も映りそうに秋の空は澄切つて、赤あ
蜻蛉かとんぼが一ツ行き二ツ行き、遠方おちかたに小さく、釣つりをする人のうし
ろに、ちらちらと帆が見えて海から吹通しの風颯さつと、濡れた衣きぬの
色を乱して記念かたみの浴衣は揺ゆめいた。親仁はうしろへ伸上つて、そ

のまま出ようとすゝる海苔粗朶のりそだの垣根もとの許もとに、一本二本咲きおくれ
た嫁菜の花、葦あしも枯れたにこはあわれと、じつと見る時、菊枝は
声を上げてわつと泣いた。

「妙法蓮華經如来寿量品第十六自我得仏来所經
諸劫数無量百千万億載阿僧祇。」
みようほうれんげきようによらいじゆりようぼん
ごうすうむりようひやくせんまんおくさいあそうぎ

川下の方から寂しんとして聞えて来る、あたりの人の氣勢けはいもなく、
家々の灯も漏れず、流ながれは一面、岸の柳の枝を洗つてざぶりざぶり
と音する中へ、菊枝は両親ふたおやに許されて、髪も結い、衣服もわざ
と同一扮おなじなりで、お縫が附添い、身を投げたのはここからという蓬菜
橋かたみから、記念の浴衣を供養した。七日経なぬかたつてちようど橘之助が命

日のことであつた。

「菊きちゃん、」

「姉さん、」

二人は顔を見合せたが、涙ながらに手を合せて、捧げ持つて、
「南無阿弥陀なむあみだぶつ仏、」

「南無阿弥陀仏。」

折から洲崎うちのどの楼ぞ、二階よりか三階よりか、海へ颯さつと打込
む太鼓。

浴衣は静しずに流れたのである。

菊枝は活いき々とした女むすめになつたが、以前から身に添えていた、

菊五郎格子の帯おび揚あげに入れた写真が一枚、それに朋輩むすめの女から、

橘之助の病氣見舞を紅^{べにふで}筆^でで書いて寄越^{よこ}したふみとは、その名の
菊の枝に結んで、今年^{はたち}は二十。

明治三十三（一九〇〇）年十一月

青空文庫情報

底本：「泉鏡花集成3」ちくま文庫、筑摩書房

1996（平成8）年1月24日第1刷発行

底本の親本：「鏡花全集 第六卷」岩波書店

1941（昭和16）年11月10日第1刷発行

入力：門田裕志

校正：染川隆俊

2009年5月10日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www>

w.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

葛飾砂子

泉鏡花

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>